
名探偵の憂鬱

MAQ

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

名探偵の憂鬱

【Nコード】

N4979X

【作者名】

MAQ

【あらすじ】

「工藤新一」だった。

工藤新一はあの時薬を飲んだ時に死んだ。

そう割り切り「江戸川コナン」として生きていく事を決めた。

だけど、失ったモノは多すぎて、もうそれは取り戻す事は出来なくて、

それを思うと俺は、前を向いて生きていく事が出来なくなっていた。

独白

俺は「工藤新一」だった。

今では、そう割り切る事にした。

俺が黒の組織に薬を飲まされてから11年。

結局、俺は工藤新一に戻る事は出来ず、

「江戸川コナン」としてあの時と同じ高校二年生17才になっていた。

江戸川コナンとして生きてきた11年間。

本当に心の底から生きてきた。と俺は言い切れる自信がなかった。

きっとそれは一番大切なモノを失って、それがもう取り戻す事が出来ないと分かったから。

生きてる意味を見失ったから。

以前、横に居るあくび娘……今はあくび女か。
がこんな事を言っていた。

『人は時を遡ることなんて出来ない。もしそれを行ってしまったら罰を受ける。』

……もうこれ以上俺に罰がくだらないように。

俺はそれだけを願って生きていく事しか出来ないでいた。

朝、道。

午前7時。

携帯の控えめなアラームで目を覚ます。

カーテンを開けると薄暗い部屋に光が差す。

外は晴天だったが特に感想を持つ事もなかった。

食事をトースト二枚という簡素なもので済ますと、歯を磨き、制服に袖を通して身なりを整える。

まだ、7時30分大分余裕がある。

髪を少しセットしてみようかな。

理由なんてない、何となくそう思った。

鏡の前に立つとそこには工藤新一と瓜二つの自分が写っていた。

当然といえば当然か………

でも、俺はもう、工藤新一ではない。

そう考えるようになってからは今のように鏡の前に普通に立てるようになった。

以前はそうでは無かった。鏡の自分が工藤新一の姿に似てくる度な吐き気がした。

何故、容姿はそっくりなのに俺は工藤新一じゃないんだ。

何故、あの人の傍に工藤新一としていけないんだ。
何故、泣いてるあの人を見てる事しか出来ないんだ。

そんな自問自答、何も出来ない自分、無力感。

鏡の姿がそれらを全部ストレートに告げてきたからだ。

だけど今は、鏡の自分の姿を見る事が出来る。
割り切ってしまったからだろうか……

俺は、楽で卑怯な生き方をしているのだろうか。

分らない。

だけど、俺は今の生き方を辞める事はどうやら出来そうにない。

自嘲をするように笑うと、髪に整髪剤をクシャクシャ付けて鏡の前
から立ち去る。

外に出ると、突き抜ける青空だった。

「本日八晴天ナリつと。」

俺……江戸川コナンは帝丹高校への通学路を歩み出した。

帝丹高校はそんなに遠くはない。

米花町の住宅集合区である三丁目のど真ん中にある。

ここから歩いて10分とちょっとで着く。

電車やバスを利用して学校に向かっている同級生を思えばなんと良心的な場所だろうか。

でも、まさか通うのが二回目になるとは思って無かったが。

「はあ。」

なんか、溜め息が出た。

少し気分が落ちる。

そんな自分に追い討ちをかける様に道は登り坂に差し掛かっていた。

なんてことない坂道だ。

傾斜が特別きつい訳でもなく、まして長い分けでも無い。

おまけに坂を登りできれば学校に着く。

なのに何故だか、足が止まる。

俺の時間はやっぱり止まってる。

坂を登ってまで抗う必要性があるのか？

江戸川コナンとして生きていく。

そこに未来はあるのか？

そんな事を考え出して足が止まった。

周りの風景がモノクロの様に色を失う。

駄目だ。俺の最近の悪い癖だ。

悪い方向に考える思考が止まらない。

そつやって、思考を重ねても答えが出ない。

あれだけ、答えを見つける事に執着していた俺が今では、誰かに答えを教えて欲しいと切望している。

（誰か……俺に……真実を……）

ポン。

「はっ！」

その時、誰かに背中をゆっくり押された。

「なにこんな所で突っ立てるのよ？」

声のする方を振り返ると、そこには俺がよく知ってる人が立っていた。

「みんな、見てるわよ。不審そうにね。

別に貴方が好奇心な目に晒されるのは構わないけど。私には関係ないし。」

赤みの混じった茶色い髪に青い瞳。
均整のとれた顔立ち。

「何、人の顔ぼーっと見てるのよ。
体調でも悪いの？」

そして、今の俺とよく似た境遇に立つ者。

「なあ、灰原。」

そう、こいつの名は灰原哀。

俺をこんな体にした組織の元研究員で自分も幼児化してしまった性別一応女。だ。

「なに？」

灰原が相変わらずのポーカークフェイスで聞き返す。

「私に関係無い。とお前が言うように。たかだか小学校からの付き合いと家をご近所さんってだけな俺にどうして声をかけてくれたんだ？」

俺は少し表情が晴れると、灰原も笑みを浮かべて答えた。

「さあ、それを推理するのが貴方でしょう？
そんな事より、そろそろ遅刻しそうだから貴方にこれ以上構ってられないんだけど？」

「ふっ、

ホント可愛くねーな。」

俺達は坂を登り出した。
登ってみるとやはりなんて事ない。
坂道だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4979x/>

名探偵の憂鬱

2011年11月15日14時04分発行